

[研究報告]

サドの「道徳」教育論

－不道徳言説にみる徳の逆照射－

山本 孝司

【要 旨】

サド (Donatien Alphonse François de Sade, 1740-1814, 通称「サド侯爵 (Marquis de Sade)」) は、今日で言うところの「サディズム」 (Sadism) の語源となった人物である。サディズムは性的嗜好の一つで「加虐性欲」という意味合いで、マゾヒズム (Masochism) とセットにされて変態性欲の俗称となっている。彼は生涯に大小五十巻にわたる文学作品を創作しているが、彼自身の倒錯した性行動から、また作品上の倒錯した性描写から、当初は好事家たちの間でのみ読まれていた。

サド文学に浸透している思想的特徴は、結論的にいえば、「悪徳」賛美である。全著作を通して、「悪徳」こそが、人間に備わった自然的本性であり、それを抑圧することなく発散させることが善であり、人間を幸福に至らしめる唯一の道であるという主張が貫かれている。そしてこのような彼の主張が、近代以降今日へと至る「常識」的道徳論とは真っ向から対立することは火を見るより明らかである。

本稿の目的は、一見すると「不道徳」という評言で一蹴されてしまうサド文学のなかに彼の「道徳」観を読み取り、サド思想の道徳教育論に読み替えることにある。

キーワード：道徳 理性 自然主義 エゴイズム 無神論

I. 問題設定

サド (Donatien Alphonse François de Sade, 1740-1814, 通称「サド侯爵 (Marquis de Sade)」) は、今日で言うところの「サディズム」 (Sadism) の語源となった人物である。サディズムは性的嗜好の一つで「加虐性欲」という意味合いで、マゾヒズム (Masochism) とセットにされて変態性欲の俗称となっている。彼は生涯に大小五十巻にわたる文学作品を創作しているが、彼自身の倒錯した性行動から、また作品上の倒錯した性描写から、当初は好事家たちの間でのみ読まれていた。

その後、20世紀に入って、サド文学は啓蒙主義思想のなかに位置づけられ、近代思想としての意義が認められることになる。そのなかでサド文学は、クロソウスキー、バタイユ、ボーヴォワールらによって、フランス革命によってもたらされた啓蒙哲学の裏面として定位される場所である。

日本においては、澁澤龍彦がサド文学の紹介を行い、シュルレアリスム運動のなかで、文学的「異端」としてではなく、ひとりの自立した思想家として扱ったことにより、サドの評価が変わっ

てきた¹⁾。

サド文学に浸透している思想的特徴は、結論的にいえば、「悪徳」賛美である。全著作を通して、「悪徳」こそが人間に備わった自然的本性であり、それを抑圧することなく発散させることが善であり、人間を幸福に至らしめる唯一の道であるという主張が貫かれている。そしてこのような彼の主張が、近代以降今日へと至る「常識」的道徳論とは真っ向から対立することは火を見るより明らかである。

本稿の主題とする道徳とのかかわりで、サドの思想に関する先行研究としては、フランクフルト学派のホルクハイマー (Max Horkheimer) とアドルノ (Theodor W. Adorno) による『啓蒙の弁証法』 (Dialektik der Klärung: Philosophische Fragmente) のなかの「ジュリエットあるいは啓蒙と道徳」があげられる。1930年代にナチス政権から逃れアメリカに亡命した彼らフランクフルト学派 (Frankfurter Schule) は、マルクス主義等を基軸とする批判理論としての社会理論提唱でもってファシズムとの対決を試みた。その過程で、当時

の既存制度のバックボーンとなる近代代理性の問い直しがなされ、啓蒙主義以降近代の陰の部分に光が当てられた。

本稿は、こうした先行研究を踏まえつつ、サドの思想の道徳教育論への読み替えを試みる。考察の手順としては、①サドの思想を近代思想のなかに位置づけるための基礎作業として啓蒙主義思想のもつ功罪について論じた上で、②サドの思想の啓蒙主義との共通項を探り、③サドの思想のもつ「道徳」教育観の描出および近代代理性信仰に対する予言的アンチテーゼを読み取る。このような作業を通して、彼の思想のなから今日の道徳教育への示唆を得たい。

II. 啓蒙主義とサド

「性的倒錯者」サドを啓蒙主義の申し子とみなす見解はしばしばみられる。たとえばポーラン(Jean Paulhan)は「ヴォルテールは宗教を、ジャン・ジャックは社会を、そしてデイドロは道徳を、それぞれ槍玉にあげたが、サドは、それらすべてを同時に攻撃した。」²⁾と述べている。ここにあがるヴォルテール (Voltaire, 1694-1778)、ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778)、デイドロ(Denis Diderot, 1713- 1784)といった面々は、まさにフランス革命前夜のフランスを代表する啓蒙主義思想家たちである。本節では、サドの思想的特質を導出するための基礎作業として、近代における啓蒙的理性の光と陰について述べておきたい。

1. 近代における理性信仰

周知の通り、近代は理性の時代であり、理性は宗教的価値、権威が批判され近代市民社会を形成するにあたってのキータームであった。近代市民社会を牽引してきたのは、言うまでもなくカント (Immanuel Kant, 1724 - 1804) に代表される啓蒙主義の思想であった。カントは啓蒙を定義するにあたって、そのものずばりのタイトルを付した論文「啓蒙とは何か」 (Was ist Aufklärung?) のなかで、「啓蒙とは、人間が自分の未成年状態から抜け出すことである」³⁾と述べているが、ここで言う「未成年状態から抜け出る」条件として「理性の公的使用」をあげる。カントの説明によると「ここで私が理性の公的使用というのは、或

る人が学者として、一般の読者全体の前で彼自身の理性を使用することを指している。」⁴⁾と述べている。この啓蒙主義で目指されたのは、理性や主体の確立による自律に基づく社会統制であった。制度としてのキリスト教が政治権力と結びついて社会を統合、支配していた時代にあって、啓蒙主義は、政治的には宗教的寛容を説き、宗教的にはキリスト教の彼岸主義に対して現世主義、世俗主義を説いた。また、世界の事象はすべて人間理性の力によって把握することが可能であると主張する啓蒙主義にとって、人知を越えた超越的で神秘的原理によって描かれる世界観は、「呪術」「迷信」による支配として批判の対象になった。このような啓蒙における理性の力への絶対的信頼を支えていたのは、理性がすべての人間に共通のもので、それゆえに理性が認める真理はただ一つであるという確信があったからである。こうした特徴が絡み合いながら、啓蒙主義の時代には、理性の光の恩恵を受けていない「未開の」、あるいは「野蛮な」世界を文明化することが人類の進歩への大きな貢献になると考えられたのである。

道徳においては、理性は、宗教を含めた慣習道徳による他律から自らの自己意識 (良心) による反省道徳による自律へとシフトしていくうえで重要な根拠となった。人間は理性を内なる光として宿すがゆえに、自己を統治する主体となり、人間は外的自然のみならず内的自然を統治する主体となった。つまり善悪の判断を慣習に従うことは別のところに置く可能性が生じたといえる。こうした自己意識の覚醒は、近代における市民社会の要諦とされることになった。近代市民社会は、こうした自己意識の覚醒した自律的個人が、契約を通して相互に結合することによって成立する。このような社会契約による「国家」概念は、ルソーの次の言葉に約言される。「市民は、主権者が求めれば、彼が国家になしうる限りの奉仕を、直ちに義務がある。しかし、主権者がにわかにおいても、共同体にとって不必要な負担は、決して臣民に課することはできない。いや、そういうことを意志することすらできない。なぜなら理性の法則の下においても、自然法則の場合と同様、原因なしには何ものも起こらないからである」⁵⁾。ルソーが「社会契約」と「服従契約」を峻別したう

えで、ある特定の支配者、元首の存在を前提として、契約がこの存在と人民との間に結ばれるとする「服従契約」を斥け、「社会契約」に基づく人民主権論を展開したのは周知のことである。このような当時としては「革命的な民主主義」の思想も、個としての人間の本性の善性に対する楽観的信頼から成立するものであり、その信頼は近代の理性信仰の文脈内にある。

2. 理性による暴力

ところで、近代啓蒙主義思想にはこれまで様々な評価が与えられている。この思想のもたらした「正の遺産」としては、基本的人権の擁護や市民社会の成立等「近代的」と冠せられる事項が数多く列挙されることである。進歩史観において、こうした「正の遺産」が評価される一方で、啓蒙主義思想の「負の遺産」にも、20世紀に入って光が当てられることになる。そのなかで、近代啓蒙思想の功罪を、強烈なインパクトでもって、世に問うたのは先にあげたホルクハイマーとアドルノによる『啓蒙の弁証法』であろう。

ホルクハイマーとアドルノによる『啓蒙の弁証法』の根本モチーフは、文明がその反対物へと転化しているという現状認識に基づく問い、すなわち「何故に人類は、真に人間的な状態に踏み入っていく代わりに、一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでいくのか」⁶⁾という問いを出発点として、その転化の由来を探ることにあつた。

彼らは啓蒙（文明化）の背後に、「主体性」の原理（自己保存の原理）に基づく「自然支配」を読みとり、思想史のなかにおけるこの自己保存の原理による西洋文明の解釈を試みたと言える。彼らの主唱しテーゼに関連し、こうした自己保存の弁証法的過程を描いたのが『啓蒙の弁証法』のなかの第1章「オデュッセウスあるいは神話と啓蒙」であった。その要約としては次の行があげられる。「あらゆる自然的な痕跡を神話的なものとして方法的に消し去ってしまった後、もはや身体でも血でも心でもなくて、いやほとんど自然的我でさえなくなってしまう自己は、超越論的、論理的な主観へと昇華され、行為に対する立法の法廷たる原理の基準点になる」⁷⁾。ホルクハイマーとアドルノが表題に掲げた「啓蒙」(Aufklärung)は、単に無

知蒙昧な状態を啓発する教育的機能を意味するのではなく、人類史的過程に貫かれている「文明化」を意味している。

啓蒙によって生み出された主体や理性は神話や呪術から人間を解放したが、理性の自己崩壊という過程をたどることになる。その極端な例はナチス・ドイツによるユダヤ人絶滅政策があげられる。市民社会的理性が描いた絶対的平等な社会は、皮肉なことに、アウシュヴィッツにおける身分も財産もまったく関係ない絶対的平等な死として実現されることになる。後年アドルノは『否定弁証法』(Negative Dialektik)のなかで次のように啓蒙のもつ「負の遺産」をシニカルに描き出す。「アウシュヴィッツ以後は、このわれわれの生存が肯定的なものであるといういかなる主張も単なるおしゃべりに見え、肯定的に設定された超越的存在から輝き出てくるような、この世界の内在の意味を作り出す試みそのものを、あの出来事は嘲笑わざるをえなくさせているのである」⁸⁾。

アウシュヴィッツは、啓蒙の結果もたらされた市民社会的理性の根本原理によって実現した。それはあたかもアドルノたちが『啓蒙の弁証法』のなかで検証した近代的啓蒙的理性の自己崩壊の過程をみごとに描き出した例証であった。このことは、とりもなおさず近代市民たる人間の物象化の過程をも意味していたのであるが、その過程は次のように集約される。「今日の人間が陥った自然への頹落は、社会の進歩と不可分のものである。経済的な生産性の向上は、一方ではより公正な世の中のための条件を作り出すとともに、他方では技術的機構とそれを操縦する社会的諸集団とに、それ以外の人民を支配する計りしれぬ優越性を付与する。個々の人間は経済的諸力の前には完全に無力であることを宣告される。その際経済的諸力は、自然に対する社会の強制力を想像を絶する高さにまで押し上げる。個々人は自分が仕える機構の前に消失する一方、前よりいっそうよくこの機構によって扶養されることになる」⁹⁾。実は、近代が信仰する理性とは「堅固な概念的連関という形式的原理以外の何ものでもな」¹⁰⁾く、理性によって打ち立てられた目的とは「いずれも啓蒙の厳密な意味に従えば、妄想であり虚偽であり、正当化という意味での『合理化』である」¹¹⁾。

アドルノたちが『啓蒙の弁証法』のなかで明かしたことは、神話そのもののなかに啓蒙の要素が含まれ、裏を返せば啓蒙が新たな神話として機能する宿命にあったということである。つまり理性と神話的なるものが人間社会のなかで分かちがたく結びついているという事実をである。その結果として「啓蒙はその原理からして、市民的世界がそれなしには存在しえない最小限の信仰をさえ容赦しない。啓蒙は、古いさまざまなイデオロギーがたえず尽くしてきたように、支配者に対して従順に奉仕したりはしない。…(中略)…その反権威的傾向の矛先を、結局のところ啓蒙は、貴族層に対すると同様に、定着した市民層に対しても向けるようになる」¹²⁾。

こうした啓蒙思想のもつ「負の遺産」を予言的に暴いてみせたのが、18世紀啓蒙主義の時代のただなかであって、その筆禍とユニークな性癖ゆえに社会的に抹殺されたサドの文学である。とりわけ道徳という視点からの、サドによる近代理性批判は執拗且つ辛辣さを極め、それゆえ近代理性のもつ隠された前提も顕わにされている。以下、その思想をたどってみよう。

Ⅲ. サド文学における思想的特質

かつてサド文学は、特殊性な文学として、所謂好色家たちの間で読まれる程度であった。サドはラ・コストおよびソーマヌ領主であり「侯爵」という爵位をもつ貴族であったが、その筆禍と遊蕩のために人生の大半を獄中で過ごした人であった。そのため彼を称して「牢獄文学者」と呼ぶ声もある。サドが一連の作品を創作した時期は、フランス革命前夜から革命を経てナポレオン帝政期までという、18世紀フランスにおいては、まさに動乱期であった。本節では、サド文学作品のなかから、彼の「道徳」観の背景にある思想的特質として、自然主義、エゴイズム、無神論の三点に焦点化し論考する。

1. 自然主義

サドと同時期のフランスに啓蒙の書として登場したのが、「宗教を理性の検証に委ね、王に対する人民の敬愛を弱めさせる傾向をもつ」としてパリ高等法院で有罪判決を受けた、ルソーの『エ

ミール』(Emile ou de l'éducation, 1762年)である。『エミール』のなかで、ルソーは「自然の教育はわたしたちの力ではどうすることもできない。…(中略)…自然の秩序のもとでは、人間はみな平等であって、その共通の天職は人間であることだ。だから、そのために十分に教育された人は、人間に関係のあることならできないはずはない。わたしの生徒を、将来、軍人にしようと、法律家にしようと、それはわたしにはどうでもいいことだ。」¹³⁾「…これが自然の規則だ。なぜそれに逆らおうとするのか。あなたがたは自然を矯正するつもりで自然の仕事をおぼちおぼちしているのがわからないのか。自然の配慮の結果をさまたげているのがわからないのか。自然が内部であることを外部からするのは、危険を二重にすることだとあなたがたは考えている。ところがそれは逆に、危険をそれさせ、弱めることなのだ。」¹⁴⁾といわゆる「自然に還れ」というテーゼを説いている。ここでは、人為的なものに対する自然の法則に従うことが主張されているが、ルソーの思想を幼児教育論に焦点化してみたさいには、そうした自然主義的要素が見出される。

教育論としてルソーの思想とサドの思想を見比べたとき、ルソーが描いたエミール少年の教育とサドの「悲惨物語」のなかのユージェニーの教育は、ある種の共通性をもつ¹⁵⁾。すなわち、エミールは孤児の設定であり、ひとりの優秀な教師によって教育を受けるということ、ユージェニーは生後まもなく親元から意図的に引き離されて育てられたということである。

前者についてルソーは次のように語っている。「エミールはみなし子である。父と母があっても同じことだ。父母の義務をひきうけるわたしは父母の権利のすべてをうけつぐのだ。エミールは両親をうやまわなければならないが、わたしにだけ服従しなければならない。それがわたしの第一の、というより、ただ一つの条件である」¹⁶⁾。ルソーが『エミール』で展開したのは自然主義の教育論である。とりわけ幼児期の教育に対しては「消極教育」を提唱する。すなわち「…わたしたちの能力と器官の内部的発展は自然の教育である。この発展をいかに利用すべきかを教えるのは人間の教育である。わたしたちを刺激する事物に

ついてわたしたち自身の経験が獲得するのは事物の教育である。……この三とおりの教育のなかで、自然の教育はわたしたちの力ではどうすることもできない。……完全な教育には三つの教育の一致が必要なことから、わたしたちの力でどうすることもできないものに、ほかの二つを一致させなければならない¹⁷⁾ という論理で、人間の内的自然に従った教育の必要性を訴える。この論理の背景には、「万物をつくるものの手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手につるとすべてが悪くなる¹⁸⁾ という彼の性善説があった。

一方、サドはユージェニーの教育について次のように語る。「…フランヴァルは、すぐさまこの子供を母親の手許から離してしまった。七歳になるまで、こうしてユージェニーは、フランヴァルが昵懇にしていた女たちの許に預けられた。この女たちは、フランヴァルに言い含められていたので、子供の健康に注意することと、読み書きを教えることしかせず、普通の年齢の娘たちが知っていなければならない宗教や道徳の訓練は何ひとつこれを伝授しようとはしなかった。」¹⁹⁾ ユージェニーは、フランヴァルと妻ファルネイユ夫人との間の娘。フランヴァルは「パリに生まれパリに住み、年金四十万リーブルと、この上無く優雅な容姿と、人好きのする美貌と、さまざまな才能とに恵まれ」た人物であったが、「道徳と宗教の義務に対してはこれをことごとく棄てて顧みなかった²⁰⁾。フランヴァルはユージェニーとの近親相姦を果たすため、幼少期より「自然」に従った教育を「意図的」に行うよう企図した。

サドの作品中、彼の教育思想がよく表されたものは副題に「不道徳な教師たち」とついた『閨房哲学』(Le cas de La Philosophie dans le boudoir)であろう。このなかで「文明」と「自然」を倒錯させて、啓蒙主義で説かれる、たとえばルソーの『エミール』で示される「自然状態→社会状態」という人間形成プロセスを無効化する。サドはドルマンセに次のように語らせている。「残虐性とは、まだ文明によって墮落させられていない人間のエネルギーにほかならない。だから、それは一つの美德であって、けっして悪徳ではない。諸君の法律とか、刑罰とか、習慣とかを廃止してしま

えばよいのである。そうすれば残虐性はもはや危険な結果を及ぼさないことになる。なぜなら、残虐性は、同じ手段によってただちに斥けられるならば、もはや効果を発揮しえないからである。それが危険なのは、文明の状態においてのみである。なぜなら、被害者はほとんどつねに、自分に対して加えられる侵害を斥けるべき力も手段も持っていないからである。けれども非文明の状態においては、もし残虐性が強者に対して加えられるならば、それは強者によって斥けられるであろうし、もし残虐性が弱者に対して加えられるならば、それは自然の法則によって強者に屈服する弱者をひとり傷つけるにすぎず、結局、いかなる不都合な事態をも生じないということになる。」²¹⁾

2. エゴイズム

サドの作品に登場する人物の特徴は、パターン化されている。すなわち、すべてを支配できる立場にある強い存在のリベルタンとその生け贄となる弱い存在の犠牲者という二つの立場からによって構成される。力をもつ者は、生殺与奪の権利をもち、力をもたない者の反応・反発を全く無視して、欲望のままに悪行を繰り返す。ここに登場するリベルタンたちの思考・行動原理はエゴイズムである。『悪徳の栄え』(Histoire de Juliette ou les Prosperites du Vice)のなかでリベルタンの主人公ジュリエットによって語られるセリフ「美德は必要どころか、有害無益なものでしかありえやしません。……美德の上に築かれた宗教のお伽話は、美德と同様、もっぱら不条理な幻影でしかありえないのです。自然の唯一の法則はエゴイズムです。ところで、美德は他人の幸福のために自己を犠牲にすることによって成立するのですから、エゴイズムと矛盾します」²²⁾は、サドのエゴイズム賛美を端的にあらわした行である。

また、『閨房哲学』で、サドはドルマンセをして、次のように語らしめている。「…人間は、すべて孤独で生まれてきたのではなかったろうか。いや、もっとはっきり言えば、すべての人間は互いに敵同士であって、互いに永久の闘争状態に置かれているのではないだろうか。もしそうだとすれば、いわゆる友愛の絆によって要求される美德

なるものが、実際に自然の中に存在するという仮説は、はたしてどういうことになるのであろう？」²³⁾ この行は、ホップズの「リバイアサン」を思い起こさせる一節であるが、サドのなかにも近代における自己保存の原理が看取される。ドルマンセによってはこの原理は、さらに「快樂」に結びつけられ、快樂主義的エゴイズムとして発展させられる。

「快樂のとき、ひとは何を望むだろうか？それはぼくたちを取り巻くすべてのものが、ただぼくたちのことだけに没頭し、ただぼくたちのことだけしか考えず、ただぼくたちのことだけに心を配ってほしい、ということだ。もしもぼくたちに奉仕する相手のみずから楽しむならば、そのとき彼らはぼくたちのことよりも、むしろ自分たちのことにより多く気を使うことになり、その結果、ぼくたちの快樂は乱されるのだ」²⁴⁾。

3. 無神論

サドの無神論的発言は彼の作品群のなかで常套句となっている。たとえば「神の存在を信ずるには、正気を失ってしまわねばならない。」（『閨房哲学』）、「神は存在しない。自然は、それじたいで充足しており、少しも動力因としての神を必要としない。」（『新ジュスティヌ』）、「この（神という）幻影は…それを考える人々の精神の外部には存在しようがなく、したがって単に、彼らの頭脳の熱中した動きの結果、にすぎない」（『悪徳の栄え』）をとってみても、18世紀当時の啓蒙的理性に依拠した認識論上の神学批判が読みとれる。

当時のフランスを含めたヨーロッパ社会における社会制度、慣習、道徳を規定していたのがキリスト教であったことは言わずもがなである。キリスト教道徳はサドの説く人間の「自然性」に立ちだかる一番の敵として当然ながら全ての作品のなかで攻撃対象となっている。先に採り上げた『閨房哲学』のドルマンセは次のように熱弁している。「キリスト教の道徳は、人間の同胞に対する関係がきわめて曖昧で、その基礎は多くの詭弁にみちているので、われわれは到底それらを認めることができない。けだし、原理を確立しようという場合には、詭弁をその基礎とすることは厳に避けなければならないのである。まずキリスト教

の馬鹿げた道徳によれば、われわれは隣人をば己れ自身のごとく愛さなければならない。たしかに、贖物が美の資格を具えることができるとしたら、これほど美事なことはあるまい。しかし何といおうと、己れ自身のごとく同胞を愛するなどということは、一切の自然の法則に反することであり、われわれの全生活を導くものはただ自然の声のみであるべきなのであるから、そんなことはありうる道理がないのである。われわれはただ自然から与えられた兄弟として、友として、同胞を愛すればよいのである。共和国においては、人間相互間の距離がなくなって、同胞の絆はいっそう緊密になるべきであるから、それだけわれわれは仲良く暮らせるはずである」²⁵⁾。

さらにドルマンセが彼による不道徳教育の教え子であるウージェニーの母ミスティヴァル夫人に向けて言った次のセリフは、サドとは世紀をまたいで登場する「神殺し」の哲学者ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1833-1900）のキリスト教批判のレトリックとその結果的産物としての「超人」思想を彷彿とさせる。「…彼女の幸福につながる道徳は一つも教えられていず、すべてが馬鹿馬鹿しい迷妄の道徳ばかりでした。あなたは彼女に神さまの話をして聞かせた。まるで神さまがこの世に存在するかのようね。それから美德の話をして聞かせた。まるですべての宗教的礼拝が、強者の詐欺と弱者の愚かしさの結果ではないかのようにね。それからあなたはイエス・キリストの話をして聞かせた。まるでこの無頼漢がペてん師でもなく、悪人でもないかのようにね！それからあなたは、やることは罪悪であると娘さんに教えたが、とんでもない、やることこそ人生のもっとも楽しい行為ではありませんか。あなたはまた、娘さんに身持の正しさを教えた。しかし若い娘の幸福は、放蕩と不道徳のうちにこそあるものであり、女のなかでもっとも幸福な女は、疑いもなく、淫蕩と不身持にもっとも深くのめりこんだ女、そしてあらゆる偏見を徹底的に馬鹿にし、世間からどう思われようと一向に介さない女でなければなりません」²⁶⁾。

IV. サドの「道徳」観—道徳の外部的虚構性の暴露

1. 『悪徳の栄え』と『美德の不幸』

彼の作品群は、『悪徳の栄え』と『美德の不幸』（Les Infortunes de la Vertu）²⁷⁾の二極に収斂されていく。この二極を貫くテーマはタイトルに示されるごとく「徳」の問題である。啓蒙主義の時代に、「道徳」をテーマに数多くの教育言説が生み出されたことは周知の事実である。サドの1795年の『閨房哲学』も、表題が「閨房の哲学または不道徳的な教育者たち、若い娘たちの教育のための対話」であったことを考えると、サドの意識のなかには（不）道徳に関する教育言説として、彼の小説を読ませようとの意図があったことがうかがえる。サドは、前述したように、社会制度と「自然」とを対置させ、後者に人間存在および行動原理の根拠を置く。

サドの作品における物語の展開パターンは、通常、行為の描写と理論展開の詳細な報告というカップリング、すなわち「違背的行為」にその「正当性の証明」のセリフが続き、物語全体がその反復によって構成される。そして、サドの作品に登場するリベルタンたちによっては、己の「悪逆」を正当化するためにしばしば道徳が相対化される。たとえば『悪徳の栄え』に登場する、主人公ジュリエットをして「だれも彼ほどうまく自らの墮落を合理化することのできるひとはおりません」と言わしめるリベルタンのノアルスイユは「罪」概念に関して次のように持論を展開する。「一般に罪と呼ばれているものは、すべて偶然的であれ計画的であれ、人間が法律と呼んでいるものに対する形式的な違反である。これによっても分かるとおり、罪とは何と手前勝手に無意味な言葉だろう、すなわち、法律というのは風俗や風土に関係のあるもので、土地土地によってずいぶんと変わるものだから、たとえば船とか駅馬車とかいうものを使えば、日曜日の朝パリで死罪になるはずだったこのおれが、同じ週の土曜にはアジアの辺境あるいはアフリカ海岸で、同じ行為を賞讃されているという事情も起こりうるのである」²⁸⁾。

このような罪を規定する法、道徳の相対化の論理的戦略で持ち出されるのも彼らが打ち出す「自然」の論理である。ノアルスイユは、ジュリエットとの会話のなかで次のように述べ、人間本性(human nature)から人間文化(human culture)へと至る近代教育の方程式を、自然と社会の逆転的倒

錯によって無効化する。「……もしもわれわれがわれわれ自身の内部に、われわれの心に萌した悪しき行為への欲望と闘う無意識の声を感ずるならば、その声は疑いもなくわれわれの偏見あるいは教育の結果でしかなく、かりにわれわれが違った風土に生まれていたら、その声もまた大いに異なっていたであろうことは疑いを容れない。……要するに良心の呵責というのは、この最初心に萌した衝動の純粹素朴な結果なのであって、習慣のみがこれを破壊することができる。われわれはかかる感情を断呼として克服すべく努力せねばならない」²⁹⁾。この道徳的相対主義の帰結として、サドは、ジュリエットの「悪逆」的メンターであるノアルスイユに「悪徳こそわれわれ人間に固有のもの、つねに自然の第一法則なのであって、それに比べればどんな立派な美德だって利己主義的なものでしかなく、分析してみれば実は美德そのものが悪徳なのだということが。要するに、人間における一切は悪徳なのだ。悪徳のみが自然の本質であり、自然の組織の本質なのだ。」³⁰⁾と言わしめる。

『悪徳の栄え』が、主人公ジュリエットの悪徳への精神の遍歴を描いた「教養小説」(Bildungsroman)であるのに対し、ジュリエットの妹ジュスティエヌが主人公となる『美德の不幸』『新ジュスティエヌ』は文化化され、完成された人間からみた「悪徳」論として『悪徳の栄え』とは対象的な作品となっている。『美德の不幸』『新ジュスティエヌ』では、リベルタンたちの食べ物にされながらも、美德を貫こうとするがゆえに苦悩するジュスティエヌの不幸へと至る過程が描かれている。ジュスティエヌは罪悪のただ中で生きていく良心の呵責に常に苛まれ、まさに彼女の存在は「道徳法則の殉教者」として描かれる。ジュスティエヌの美德ゆえの苦悶は次のセリフによく表現されている。「ああ、神さま！……あたしはもう、悪事という悪事を知りつくしてしまっただけでございました。……でも、あたしは間違っていたようです。……彼はあたしの信念によって、あたしを縛っているのですもの。もしあたしが慎み深い女でなかったら、あたしはすぐ追い払われてしまったかもしれない。つまり、あたしは美德のおかげで罪人になろうとしているのだ

わ。神さま、それでは、善が必然的に悪を生み出すという考えを認めなければならないのでしょうか？」³¹⁾

2. 道徳の系譜学的再考

上にみたようなサドの「道徳」論は、一見すると「不道徳」という言葉でまとめられてしまう見解であろう。しかしながら、サドによる道徳の相対化には、近代において、神という外部的権威を失った後の、便宜的に設けられた法、道徳の虚構性に挑戦する、近代人の持ち合わせた反省道徳的姿勢を読み取ることも可能である。近代理性とそれに基づく啓蒙主義は、既に述べたように、超越的な神の物語を斥け、人間理性（良心）による自己統治を推し進めた。その過程で、人々に見えない形で、社会秩序を根拠づけ、法、道徳感覚を支える外部が設定された。それはたとえばホッブズの「リバイアサン」であり、ルソーが『社会契約論』で持ち出した「一般意志」という概念であり、共同体のなかにありながら、いずれの共同体員の手から離れた外部である。つまり、個人の理性に根拠を置きながらも、その実、法、道徳による社会秩序を機能させるためには、神とは異なる表現で外部を設定し、機能させてきたのが近代である。しかもその外部の虚構性は、人間の意識に対して隠蔽されていなければならない。

サドに先立って17世紀フランスにおいて無神論者に対してキリスト教弁証論を展開したパスカル (Blaise Pascal, 1623-1662) は、サドとは別の論法でもって法、習慣を無効化している。「法の依拠するところをよく調べようとする者は、法がはなはだ頼りなく、またいい加減であることに気づくだろう。……国家に背き、国家を覆す術は、既成の習慣をその起源にまで遡って調べ、その習慣が何ら権威や正義に支えられていない事実を示して習慣を揺さぶることにある。……法が欺きであることを民衆に知られてはならない。法はかつて根拠なしに導入されたが、今ではそれが理にかなったものにみえる。法が正しい永遠な存在であるかのように民衆に思わせ、その起源を隠蔽しなければならない。さもなければ法はじきに終焉してしまうだろう」³²⁾。

19世紀に、こうした法、道徳を支える外部の

虚構性を暴いてみせたのが、ニーチェであった。彼は『道徳の系譜』の第二論文「『負い目』・『良心の疚しさ』・その他」のなかで、「良心」と一般に呼ばれているものが「人間の内なる神の声」ではなく、外部から内へと向かう残忍性の本能と述べる。「内面化され自己自身の内へ逐い戻された動物人間のあの自己荷責への意志、あの内攻した残忍性……飼いなすために『国家』のうちへ閉じ込められた動物人間は、この苦痛を与えようとする意欲のより自然的な抜け口が塞がれて後は、自分自らに苦痛を与えるために良心の疚しさを発案した」³³⁾。(ちなみに永井は、このニーチェの『道徳の系譜』に依拠しながら、「道徳の外部にそれを支える道徳はない……道徳空間を内側から閉ざす道徳イデオロギーを成立させて、十人全員に取り決めをした最初の動機を忘れさせる……道徳的」な人とは道徳の存在理由を知らない人のこと」³⁴⁾と述べている。)

近代理性が機能する上でのこうした外部の隠蔽は、他方で法、道徳に無反省的に従う「美德」な人間を生み出したことも確かである。たとえば第二次大戦中にアウシュヴィッツにおいてユダヤ人の大量虐殺に手を染めていたアイヒマンは、「アイヒマンという人物の厄介なところはまさに、実に多くの人々が彼に似ていたし、しかもその多くの者が倒錯してもいわずサディストでもなく、恐ろしいほどノーマルだったし、今でもノーマルであるということなのだ」³⁵⁾とアーレントが述べているように、行為の残虐性にもかかわらず、「きまり」への服従的態度の点では、まったく「ノーマル」であった。

サドは隠蔽された道徳の根拠の虚構性を暴きつつ、既にみたように、人為的、人工的な社会制度に対置する形で「自然」を持ち出す。サドの一見「不道徳」きわまりないレトリックによって展開される社会制度に対置した形での「自然」崇拜には、こうした「根拠なき」外部に対する冷ややかな眼差しと、そうした外部への無反省的に隷従することへの、ある種の警鐘を読み取ることができる。

V. 結語 - 道徳教育への示唆

ホルクハイマーとアドルノは『啓蒙の弁証法』

のなかで「[サドやニーチェの] 非情な教説は、仮借なく支配と理性との同一性を告知することによって、じつはかえって市民層の道徳的従僕たちの教説よりも情け深いものを持っている」³⁶⁾と付記した。サドの不道徳的言説を「道徳」教育論として読み直すという本稿の企てのライトモチーフも、彼らのこの指摘にヒントを得たものである。

近代以降、啓蒙主義のプロジェクトは「未完」と言われつつも、近代理性の肥大化とそれに基づく、人間の内外に存する「自然」に対する抑圧的支配は続いている。もちろん、サドのように社会制度、道徳の全面否定による「自然」賛美でこうした「理性」化の波に抗うことは「現実的」ではない。

しかしながら、社会秩序を維持するための道徳、制度は、共同体の外部で、前近代的な神に代わって「超越性」を持たされており、人間の意識に対し、神と同様にその存在根拠が隠蔽されていることに気づいているかどうかで、道徳、制度に対する姿勢は変わってくる。すなわち運用に関する「従順さ」を求めてアイヒマンのように無反省的に道徳、制度を遵守するか、見えないなりにその根拠を追求し続けるかという点においてである。後者は、慣習道徳から脱するための反省道徳の要件であったはずである。サドの不道徳な言説は、こうした反省道徳の本義を、逆説的に浮かび上がらせてくれるという意味で、道徳教育的であり得る。

[註]

1) たとえば次の評言がある。「サドの著作が多くの分野ではたしてきた先駆的役割は、今日高く評価されているが、それはたんに文学史的な評価にとどまるものではなく、その革命思想ないしユートピア思想の社会思想的見地からも、又、医学的心理学的立場からも、さらに又シュールレアリスム、実存主義のような二十世紀の芸術運動、思想運動の中でも、あるいは又、キリスト教ことにカトリックの立場からも、きわめて重要な意味を認められているのである。」(現代思潮社編集部編(1963)『サド裁判 上』現代思潮社、p.17-18.)

- 2) ジャン・ポーラン(澁澤龍彦訳)『サド侯爵とその共犯者:あるいは羞恥心の報い』河出書房新社、1997年。
- 3) カント『啓蒙とは何か 他4篇』、岩波書店、1974年、p.7.
- 4) 同書、p.10-11.
- 5) ルソー(桑原武夫・前川貞次郎訳)『社会契約論』、岩波文庫、1954年、p.50.
- 6) マックス・ホルクハイマー&テオドール・W. アドルノ(徳永恂訳)『啓蒙の弁証法』、岩波書店、1990年、p.412.
- 7) 同書、p.37.
- 8) アドルノ(木田元ほか訳)『否定弁証法』、作品社、1996年、p.438-439.
- 9) ホルクハイマー&アドルノ『啓蒙の弁証法』、p.xiv.
- 10) 同書、p.128.
- 11) 同書、p.128.
- 12) 同書、p.142.
- 13) ルソー(今野一雄訳)『エミール 上』、岩波書店、1962年、p.25-31.
- 14) 同書、p.42.
- 15) ちなみにサドは『新ジュスティーン』のなかでルソーを批判している。「…人類はすべて権利においても力においても平等だなどとあえて主張する人間ほどおめでたい人間であるにちがいない。こんな理屈に合わない説をふりまわす人間は、ルソーのような厭世的な性格の男だけだろう。ルソーは、自分がとても弱い人間なので、他の人間の水準に自分が高まろうとはせず、むしろ他の人間を自分の水準まで引き下げることを望んでいたらしいのだ。」(サド(澁澤龍彦訳)『新ジュスティーン』河出書房、1987年、p.202.)
- 16) ルソー『エミール 上』、p.53.
- 17) 同書、p.24-25.
- 18) 同書、p.23.
- 19) サド(澁澤龍彦訳)「悲惨物語」『ソドム百二十日』、河出書房、1991年、p.112.
- 20) 同書、p.108.
- 21) 同書、p.112-113.
- 22) サド(澁澤龍彦訳)『悪徳の栄え 上』、河出書房、1990年、p.305.
- 23) サド(澁澤龍彦訳)『閨房哲学』、河出書房、

- 1992年、p.128.
- 24) 同書、p.223.
 - 25) 同書、p.165.
 - 26) 同書、p.240.
 - 27) 『美徳の不幸』は後に大幅に加筆され、『ジュスティーナあるいは美徳の不幸』(Justine ou les Malheurs de la Vertu)、さらに『新ジュスティーナ』(Nouvelle Justine)として出版された。
 - 28) サド『悪徳の栄え 上』、p.81.
 - 29) 同書、p.81-82.
 - 30) 同書、p.54.
 - 31) サド『新ジュスティーナ』、p.22-23.
 - 32) パスカル(津田穰訳)『パンセ 上』、新潮文庫、1952年、p.194-195.
 - 33) ニーチェ(木場深定訳)『道徳の系譜』、岩波文庫、1940年、p.109-110.
 - 34) 永井均「なぜ悪いことをしても〈よい〉のか」大庭健・安彦一恵・永井均『なぜ悪いことをしてはいけないのか』ナカニシヤ出版、2000年、p.49-50.
 - 35) ハンナ・アーレント(大久保和郎訳)『イェルサレムのアイヒマンー悪の陳腐さについての報告』、みすず書房、1994年、p.213.
 - 36) ホルクハイマー&アドルノ『啓蒙の弁証法』、p.175.

[Study Report]

Sade's Moral Education Theory; Searching for the Moral Idea in his Immoral Remarks

Takashi Yamamoto

Department of Social welfare, Kyushu university
of Nursing and Social welfare

【Abstract】

Marquis de Sade is a person who became etymological of "Sadism". Sadism is one of the sexual preferences, it is made to masochism and the set, and the common name of the sexual perversion. He is creating the literary work over bigness and smallness 50 volumes through life. At first, his work was read only among dilettantes because of his perverted sex and Perverted Sexual description in work.

A thought feature of the sadist literature is "Corruption" admiration. Through all works, he insisted that Only "Corruption" is a natural nature, and emanating without suppressing it is good, and it is the only road where man is made to arrive happily. It is clear that his opinion conflicts with "Common sense" morality theory in the forehead.

The purpose of this text is to find morality in Sade literature, to find a theory of the moral education in thought of Sade.

Key words : morality reason naturalism egoism atheism